

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 28 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24330055

研究課題名(和文) 戦間期ヨーロッパにおける国家形成と地域統合に関する比較研究

研究課題名(英文) Comparative Studies of European Nation-state Building and Regional Integration in the Interwar Period

研究代表者

大島 美穂 (Oshima, Miho)

津田塾大学・学芸学部・教授

研究者番号：20203771

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦間期におけるヨーロッパ諸国の国家意識、並びに「地域」形成を、国内政治のみならず、国際政治の動向との関連で考察し、特に新興国家における国家形成と「地域統合」がナショナリズムを背景にして、表裏一体となって進んでいる状況を明らかにした。同時に、当時の各国の思想、社会、政治状況はその国単独で進展していたわけではなく、国際政治と連動し、相互に影響を受けていたことが判明し、研究対象地域の国家意識並びに「地域」形成の進展の中に一定の類似点が見られることを指摘した。

研究成果の概要(英文)：This research examines national consciousness and “regional” formations in European countries during the Interwar Period in relation to national politics and international politics, and reveals that national formations and “regional integrations” in European countries, especially in new countries, proceeds together amidst the background of nationalism. At the same time, thought, society, political conditions in each country didn't proceed in the country itself, but they were linked by international politics and affected each other. This research also points out certain similarities in the process of the formation of national consciousness and “regional” formations in European countries.

研究分野：国際関係学

キーワード：ナショナリズム ヨーロッパ 国家形成 国際関係 地域統合 戦後秩序 戦間期 比較政治

## 1. 研究開始当初の背景

戦間期におけるヨーロッパ、とりわけロシア、東欧のナショナリズムに関しては、H. Kohnの一連の研究を初めとして、P.F. シュガー、I.J. レデラー(1981)など枚挙に暇がない(今井淳子)。特に Kohn は東北欧諸国のナショナリズムの歴史的展開をその発生時より思想、社会、政治から比較の観点を持ちながら論じ、その後のナショナリズム論の興隆の中で E.J. Hobsbawm (1992)、E. Gellner (1987)などに影響を与え思想、文化面でのナショナリズムの研究の草分け的存在となった。しかしながら、諸民族がモザイク状に存在する戦間期の東欧諸国において、画一的な国境の形成は新たに少数民族問題を生み出し、新興国家においてイレデンティズムの動きを形成した(R. Brubaker:1996)。すなわちヨーロッパ国際政治秩序形成の視点から俯瞰すると東欧における新たな国民国家形成はそれに伴った係争課題の発生を余儀なくされ、その結果、新興国家を新たに統合することがヨーロッパの平和につながるという論理(E.H. Carr; 1942)やバルカン連邦構想のような連邦構想(菅原淳子)を生み出すことになったのである。こうした国家形成と地域統合案の逆説的な関係については、古くは Carr (1945) が国際関係論的な観点から指摘し(1945)、また百瀬宏(1988)が小国論の観点から議論しているが、国際政治史の中に位置づけて諸国の国内政治・社会・文化の変動とヨーロッパ国際政治の時代的な潮流との関係で議論しているものは見られない。むしろ、EUの統合に繋がるヨーロッパ統合思想に関して、多くの研究が国際的に存在し(A. Pagden; 2011)、特にヨーロッパ大陸における汎ヨーロッパ主義並びにその運動については資料集(W.D. Gruyter; 1984)も出版され研究の蓄積がある。日本においては遠藤乾編(2008)が従来顧みられなかったヨーロッパ統合の負の部分まで踏み込んで、その歴史を通時的に検討し、なかでも板橋拓己は従来タブー視される傾向のあったドイツ・ナショナリズムと中欧(ミッテル・ヨーロッパ)構想の関係を研究している。しかしながら、これらはドイツ政治思想史の文脈で捉えられ、当時の後進国であった東北欧諸国、ロシアをも含んだ視点は見受けられない。

戦間期における上述の問題については、研究分担者の浜が亡命ロシア知識人のユーラシア構想を、石野はフィンランドのイレデンティズムを一次史料に基づく研究を行って成果を挙げ、国際学会にもその成果を問うてきた。バルカン、なかでもブルガリアの連邦主義と「大ブルガリア主義」に関しては研究分担者の菅原の実証研究の蓄積があり、さらに山中は E.H. カーの思想と国際政治の関係に関する実証研究をキール大学で行う中で、ヨーロッパ大陸の地域統合と国家形成の関係を構造的に見渡す視点の構築に努めた。研究代表者の大島は、北欧を中心としたヨーロ

ッパの国際関係における地域協力の研究を行い、国際政治における地域協力・地域統合の意味を問うてきた(大島;2003)。研究分担者の網谷龍介はドイツを基盤に比較政治研究を行う過程で機能主義的統合論を戦間期のドイツ語圏の政治思想をも含めて検討している。研究メンバーは一連の研究会を通して、各人の研究に関する議論を深めていくことによって、以下の三つの仮説を得た。戦間期におけるヨーロッパの新興国家における国家形成と連邦構想(地域統合)が表裏一体となって進んでいること、亡命者を含むヨーロッパ周辺国家のナショナリズムと連邦構想が独自の社会、文化、政治的文脈にありながら、当時のヨーロッパの国際政治状況を反映した一定の相似的な方向性を抱いていること、この状況の解明にあたっては、戦間期ヨーロッパの政治思想、社会、政治状況を形成してきたその国際政治構造への把握が不可欠であること、こうした問題を検討する際に共同研究が不可欠であることが判明し、本研究プロジェクトを立ち上げるに至った。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、戦間期におけるヨーロッパ諸国の国家意識、並びに「地域」形成に関して国内政治・社会状況とヨーロッパ国際政治の動向との関連で考察し、1920~30年代のヨーロッパにおける国家と地域の関係について検討することにあつた。ヨーロッパの地域統合というと現在のEUに代表されるヨーロッパ主義に焦点をあてた研究が主流であるが、本研究では、当時、新興国家、後発国家において存在した膨張主義的な構想(大フィンランド主義、ユーラシア主義、「大ブルガリア主義」、「大セルビア主義」、中欧構想)に注目し、国家形成と拡大した地域構想がこの時期においてなぜヨーロッパ諸国における一つの潮流となったのかを内在的、外在的要因から考察した。

なお本研究では、以下の3点に重点を置いて研究を遂行することを目的とした。(1)戦間期における各国の国民国家形成に対する思想、社会的運動と「地域統合」案(連邦構想)の比較研究による各国の特徴の抽出、(2)(1)に関する各国相互の関係・影響、(3)これらを下支えしたヨーロッパ国際政治状況の政治、思想、社会面での構造的意味、の3点である。

## 3. 研究の方法

### (1) 全体レベル

本研究は、複数の地域研究者による実証的な歴史研究の総合プロジェクトとなるために、各研究者独自の研究の進展と、それらと比較・総合するための研究会を開催した(2012年度に3回、2013年度に3回、2014年度に1回実施)。研究会では、各研究者がこれまで行ってきた研究成果やそれぞれ担

当する研究課題に関する先行研究や資料の紹介を行った。また相互交流をはかるとともに、研究全体の理論的枠組みの確認と共有化、比較対照のために論点の確認を実施し、個々の研究の有機的な連携をはかった。また研究会に本研究プロジェクトの分担者、協力者以外の地域専門家も招き、異なった視点からの研究の発展に努めた。2014年度10月には、Dr. Oula Silvennoinenをフィンランドから招聘し、科研研究会にて“On the Periphery of a Genocide: Finland and the Holocaust”の発表を行ってもらい、さらにバルト＝スカンディナヴィア研究会と共催で、“Lost Generation: Rise and Fall of Radical Nationalism in Interwar Finland”の講演会を実施した。

以上の研究会を通じて、各研究者が念頭においた点は以下の2点であった。

各地域・国家における戦間期国際政治秩序のもたらした影響および1920年代～30年代にかけての変化

との関わりでそれぞれの地域、国で特に重要となる各アクター（政治家、思想家、運動家）の政治・社会・文化面での活動の大枠を把握し、それが国内、国際的に与えた影響

以上に記したような全体レベルでの研究を実施し、その成果を研究者個々の研究に反映させるようにした。

## （2）各研究者レベル

各研究者はそれぞれの調査地へ赴き、資料収集、関連研究者との研究交流を行った。海外調査を行う際に、各研究対象地域の専門家と面談し、研究の方向性についての確認を行った。各研究者は既に各々の研究対象地域並びに関係研究機関、研究者について熟知し、交流を持っており、各々がそれぞれの地域への資料収集と研究者との交流に努めた。具体的には研究代表者の大島がノルウェー、研究分担者の菅原がブルガリア、柴がセルビア、浜がロシア、石野と研究協力者の出町がフィンランド、山田がアイルランドでそれぞれ現地調査を実施した。さらにそこで得た知見を、上記に記したように定期的に開催した研究会で報告、検討し、研究の有機的な連関を形成した。各地域の比較を可能とし、それぞれの特色を明らかにするために、いくつかの問題を設定し、そのモデル化に努めた。また学会、研究会での報告を通して、研究の精度をあげることに努めた。

## 4. 研究成果

### （1）学際的な研究成果

3年間にわたる研究活動の結果、各研究者の専門性を生かした学際性豊かな研究成果を出すことができた。

全体レベルとしての研究成果として、学会での共同発表が挙げられる。研究分担者の浜と山中は日本国際政治学会2012年度研究大会（2012年10月19日 名古屋国際会議場）

分科会・トランスナショナルのパネル「戦間期の国際秩序抗争 トランスナショナルイメーজとその相対化」にて「戦間期イギリスの国際関係研究におけるナショナリズム論 チャタム・ハウス（王立国際問題研究所）での議論を中心に」（山中）『汎イイズム』の伝播と思想交流 戦間期ロシアと『アジア』を中心に」（浜）の研究報告を行い、戦間期におけるナショナリズムについての比較を行うことで、戦間期の国際秩序構想が抱えていた課題を浮き彫りにした。

また、研究代表者の大島と研究分担者の石野は日本国際政治学会2014年度研究大会（2014年11月14日 福岡国際会議場）分科会・欧州国際政治史・欧州研究のパネル「ヨーロッパ大陸の外から見る地域、統合、ナショナリズム」にて「戦間期欧州国際秩序への二つの志向性 ノルウェーの極地における国際協調主義と領土拡張主義」（大島）「カレリア学徒会の『大フィンランド』—戦間期フィンランドにおける領土膨脹思想と運動」（石野）の研究報告を行い、同時代に発生したノルウェー、フィンランド両国の領土拡張思想の比較を行い、その相違点、並びに戦間期国際政治の構造の一端を明らかにした。

また、個人レベルでの研究も確実に遂行され、学際性豊かな研究成果が発表された。以下に各研究者の研究成果の概略を記す。

研究代表者の大島は、ノルウェーの調査を通じて、戦間期ノルウェーで生じた極地における国際協調主義と領土拡張主義の相反する思想が国際関係の変動とどのように関係していたのかを国際政治の視点から読み解いた。研究分担者の網谷は、戦間期ヨーロッパの国際政治との関係を踏まえた西ドイツの戦後体制形成に関する研究成果を発表した。研究分担者の菅原は、30年代のブルガリア政治ならびにバルカン諸国との関係に関する研究を遂行した。研究分担者の浜は、ユーラシア主義と汎イイズム論についての成果を国際学会で発表した。研究分担者の石野は、戦間期フィンランドにおける「大フィンランド」実現を目的に掲げた学生団体の論理についての分析を通して、戦間期国際秩序と国内政治との関係を明らかにした。研究分担者の山田は、アイルランドでの調査を通じて戦間期アイルランドにおける中国・朝鮮・日本意識についての研究成果を研究会、学会にて発表を行った。研究協力者の百瀬は、戦間期の国際関係の歴史的意義を問い直すために、「小国」のリアリズム論についての研究成果を発表した。研究協力者の出町は、フィンランドでの調査を通じて、世紀末から戦間期にかけてのフィンランド人知識人の海外ネットワークの形成について研究を行い、石野、百瀬との協議を通じて戦間期の国際政治構造下に置かれたフィンランドの状況に関する考察を行った。

研究分担者の山中は、戦間期イギリスで進

展した国際関係研究におけるナショナリズム論についての研究成果を出したが、研究最終年度9月に急逝した。研究代表者の大島は、2015年2月に山中の研究を国際政治理論から再考したシンポジウム「戦間期の秩序構想と国際政治理論」(南山大学)での開催に協力した。シンポジウムには研究メンバーが出席し、山中が行ってきた戦間期の地域構想研究が普遍的な国際政治理論研究に貢献することを再確認した。なお、本科研の研究成果を含めた山中の遺稿集が近年刊行予定である。

### (3)アウトリーチ活動

研究成果を一般社会に還元するために、2014年5月23~6月27日に津田塾大学オープンスクールにてオムニバス講座「歴史に見るヨーロッパの光と影 ヨーロッパ周辺国における国家意識と地域形成」(全6回)を開講し、盛況であった。

以上の研究成果から明らかなように、戦間期におけるヨーロッパ諸国の国家意識、並びに「地域」形成に関して国内政治・社会状況とヨーロッパ国際政治の動向との関連で考察し、1920~30年代のヨーロッパにおける国家と地域の関係について検討するという当初の課題はほぼ達成したといえる。しかし、いくつか積み残した課題もある。1点目は全体での研究成果は出したものの、総括的な研究成果を出すにはいたらなかったことである。2点目は、各研究者レベルで遂行した研究成果を研究メンバー全体で共有する機会が少なかったことである。以上2点の課題は、時間的制約が大きな原因であったので、今後、各研究者が本研究課題で取り組んだ研究を進展させると同時に、共同研究の機会を再び設けることで国際関係研究に寄与することに尽力したい。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

- (1)石野裕子「『大フィンランドは祖国と同様である』エルモ・カイラと設立初期のカレリア学徒会における地域構想」『地域研究』(京都大学地域研究統合情報センター)査読有、第15巻2号、2015年9月刊行予定、頁数未定。
- (2)網谷龍介「日本におけるEU・ヨーロッパ政治研究の可能性」『上智ヨーロッパ研究』査読有、第7号、2015年、107-123頁。  
[http://repository.cc.sophia.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/36459/1/200000929954\\_000007000\\_107.pdf](http://repository.cc.sophia.ac.jp/dspace/bitstream/123456789/36459/1/200000929954_000007000_107.pdf)
- (3)浜由樹子「オリエント/オクシデントを越えて ロシアのオリエンタリズム研究

によせて」『国際関係研究所所報』(津田塾大学)査読無、第49号、2014年、1-7頁。

- (4)山中仁美「戦間期イギリスの国際関係研究における『理論』チャタム・ハウスにおけるナショナリズム論をめぐって」『日本国際政治学会編『国際政治』査読有、第175号、2014年、14-26頁。
  - (5)山田朋美「20世紀初頭におけるアイルランド人宣教師の中国認識」『ICS Monograph Series』査読無、No.22、2013年12月、全21頁。
  - (6)網谷龍介「比較政治研究における『歴史』の変容」『同時代史研究』査読無、第6号、2013年、27-35頁。
  - (7)石野裕子「両大戦間期のフィンランドにおける民族文化表象と政治 1935年の『カレワラ』百周年と3つのカレワラ祭を題材に」『北欧史研究』査読有、第29巻、バルト=スカンディナヴィア研究会、2012年、22-45頁。
- [学会発表](計20件)
- (1)Ryosuke AMIYA-NAKADA “Lightening of Citizenship and Its Implication for Social Policy: ‘Social Security Lite’ in the Making?,” European Union Studies Association, Boston, USA, 7 March 2015.
  - (2)百瀬宏「戦後フィンランド外交のリアリズム」『北欧文化協会、京橋プラザ区民館(東京都中央区)、2015年3月9日。
  - (3)浜由樹子“Eurasianism and Asianism: the Emergence and the Revival”日露人文社会フォーラム、東北大学(宮城県仙台市)、2015年3月5日。
  - (4)石野裕子「日本におけるカレワラの受容」『北欧文化協会、京橋プラザ区民館(東京都中央区)、2015年2月10日。
  - (5)山田朋美「日本におけるヨーロッパ観 戦間期アイルランドの事例」『国際関係史学会、国際交流基金ホール(東京都新宿区)、2014年12月6日。
  - (6)大島美穂「戦間期欧州国際秩序への二つの志向性 ノルウェーの極地における国際協調主義と領土拡張主義」『日本国際政治学会2014年度研究大会、福岡国際会議場(福岡県博多区)、2014年11月14日。
  - (7)石野裕子「カレリア学徒会の『大フィンランド』: 戦間期フィンランドにおける領土膨張思想と運動」『日本国際政治学会

- 2014 年度研究大会欧州国際政治史・欧州研究 I 分科会、福岡国際会議場(福岡県博多区)、2014 年 11 月 14 日。
- (8)大島美穂「戦間期ノルウェーにおけるグリーンランド東部獲得運動の興隆と衰退 北極の離島に対する『国益』の意味するもの」北欧文化協会、京橋プラザ区民館(東京都中央区)、2014 年 10 月 3 日。
- (9)山田朋美「植民地朝鮮とアイルランド宣教会 カソリック・コロンバン会の全羅道ミッション」早稲田大学韓国学研究所・若手研究会、早稲田大学(東京都新宿区)、2014 年 6 月 20 日。
- (10)出町未央「世紀転換期のフィンランドにおける国際関係 1900 年パリ万博を例に」北欧文化協会、京橋プラザ区民館(東京都中央区)、2014 年 6 月 13 日。
- (11)百瀬宏「書評：アンティ・クヤラ『ソビエットの言うなりだったのか？』(2013)「フィンランド化」論の再考に寄せて」バルト=スカンディナヴィア研究会、早稲田大学(東京都新宿区)、2014 年 2 月 1 日。
- (12)山田朋美「戦間期におけるアイルランド人の東アジア認識 日本・欧米列強の中国・朝鮮支配と聖コロンバン会の宣教活動」北東アジア学会・サテライト研究会、日本大学(東京都千代田区)、2013 年 12 月 23 日。
- (13)Yukiko HAMA “An Ideological Crossroads: Pan-isms in Russia and Japan during the Interwar Period,” The Association for Slavic, East European and Eurasian Studies, 45th Annual Convention, Marriott Copley Place, Boston, USA, 22 November 2013.
- (14)山田朋美「戦間期におけるアイルランド人のアジア認識 聖コロンバン会の中国・朝鮮認識を通して」2013 年度日本国際政治学会国際交流分科会、朱鷺メッセ(新潟県新潟市)、2013 年 10 月 25 日。
- (15)百瀬宏「教学体験の回顧に寄せて」2013 年度日本国際政治学会共通論題「日本の国際政治学を考える 学問の在り方と教育のあり方」朱鷺メッセ(新潟県新潟市)、2013 年 10 月 25 日。
- (16)山田朋美「アイルランド人宣教師の中国認識の変遷」日本国際文化学会、龍谷大学(京都府京都市)、2013 年 7 月 6 日。
- (17)Hitomi YAMANAKA “British IR Debate in Wartime Japan,” International Studies Association 2013 Annual Convention, Hilton San Francisco Union Square, California, USA, 6 April 2013.
- (18)Yuko ISHINO “Between an Imagined Border and a Reality: Ideas of the Finnish Eastern Border in the Context of Finnish-Russian Relations,” BRIT (Border Regions in Transition) XII 2012, Dongseo University, Busan, South Korea, 16 November 2012.
- (19)浜由樹子「ロシアにおけるユーラシア主義 - 『アジア』概念との関係を中心に」日本国際政治学会 2012 年度研究大会トランスナショナル 分科会、名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)、2012 年 10 月 19 日。
- (20)山中仁美「戦間期イギリスの国際関係研究におけるナショナリズム論」日本国際政治学会 2012 年度研究大会トランスナショナル 分科会、名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)、2012 年 10 月 19 日。
- 〔図書〕(計 11 件)
- (1)大島美穂、岡本健志編著『ノルウェーを知るための 60 章 エリア・スタディーズ 132』明石書店、2014 年、3-4、39-44、74-92、155-158、227-229、300-302、315-327 頁。
- (2)網谷龍介、伊藤武、成廣孝編『ヨーロッパのデモクラシー』改訂第 2 版、ナカニシヤ出版、2014 年、592 頁。
- (3)大島美穂「北欧の市民社会 ノルウェーにおける NGO」山本武彦編著『市民社会の成熟と国際関係』早稲田大学現代政治研究所叢書 39、志學社、2014 年、181-204 頁。
- (4)浜由樹子「訳者あとがき」デイヴィッド・シンメルペンニク=ファン=デル=オイエ著、浜由樹子訳『ロシアのオリエンタリズム ロシアのアジア・イメージ、ピョートル大帝から亡命者まで』成文社、2013 年、285-293 頁。
- (5)浜由樹子「ロシアにおけるアジア主義とユーラシア主義」松浦正孝編著『アジア主義は何を語るのか 記憶・権力・価値』ミネルヴァ書房、2013 年、166-185 頁。
- (6)菅原淳子「体制転換後のブルガリア 変わったもの、変わらないもの」高橋和、中村唯史、山崎彰編『映像の中の冷戦後世界 ロシア・ドイツ・東欧研究とフィルム・アーカイブ』(山形ドキュメンタリーフィルムライブラリー・セレクション第 3 集)山形大学出版会、2013 年、144-160

頁。

- (7) 浜由樹子「思想としての戦間期ユーラシア主義」塩川伸明、小松久男、沼野充義、宇山智彦編『ユーラシア世界1 東と西』東京大学出版会、2012年、51-72頁。
- (8) 大島美穂「第二次世界大戦直後のノルウェーにおける暫定政権の形成 戦後世界の考察の一助として」百瀬宏編『変貌する権力政治と抵抗 国際関係学における地域』彩流社、2012年、97-118頁。
- (9) 菅原淳子「1860年代のブルガリア人移民社会とバルカン諸国」百瀬宏編『変貌する権力政治と抵抗 国際関係学における地域』彩流社、2012年、15-46頁。
- (10) 百瀬宏「戦後フィンランドの対ソ政策『小国』のリアリズム再考」百瀬宏編『変貌する権力政治と抵抗 国際関係学における地域』彩流社、2012年、119-149頁。
- (11) 石野裕子『「大フィンランド」思想の誕生と変遷 叙事詩カレワラと知識人』岩波書店、2012年、全288頁。

〔その他〕

南山大学アジア・太平洋研究センター主催シンポジウム「戦間期の秩序構想と国際政治理論」南山大学名古屋キャンパス（愛知県名古屋市）2015年2月20日。  
研究代表者大島美穂が司会およびコメントーターとして協力。

「歴史に見るヨーロッパの光と影 ヨーロッパ周辺国における国家意識と地域形成」津田塾大学オープンスクールオムニバス講座（全6回）津田塾大学千駄ヶ谷キャンパス、2014年5月23日～6月27日。

5月23日 大島美穂「歴史に見るヨーロッパの光と影：ナショナリズム、リージョナリズム、インターナショナリズム」  
5月30日 網谷龍介「ドイツと中欧構想」  
6月6日 柴宣弘「大セルヴィア主義とユーゴスヴィア」  
6月13日 菅原淳子「『サン・ステファノのブルガリア』とマケドニア問題」  
6月20日 石野裕子、百瀬宏「大フィンランド主義と文化」  
6月27日 浜由樹子、山田朋美「ヨーロッパとアジアをつなぐもの」

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大島 美穂 (OSHIMA, Miho)  
津田塾大学・学芸学部・教授  
研究者番号：20203771

### (2) 研究分担者

網谷 龍介 (AMIYA, Ryosuke)  
津田塾大学・学芸学部・教授  
研究者番号：40251433

菅原 淳子 (SUGAHARA, Junko)  
二松學舎大學・国際政治経済学部・教授  
研究者番号：40196697

浜 由樹子 (HAMA, Yukiko)  
津田塾大学・国際関係学研究所・研究員  
研究者番号：10398729

石野 裕子 (ISHINO, Yuko)  
常磐短期大学・キャリア教養学部・准教授  
研究者番号：70418903  
(平成24年4月～平成25年3月、平成26年4月～平成27年3月 研究分担者)

山中 仁美 (YAMANAKA, Hitomi)  
南山大学・経済学部・准教授  
研究者番号：30510028  
(平成24年4月～平成26年11月 研究分担者)

山田 朋美 (YAMADA, Tomomi)  
津田塾大学・学芸学部・助教  
研究者番号：80734467  
(平成24年4月～平成26年3月 研究協力者、平成26年4月～平成27年3月 研究分担者)

### (4) 研究協力者

百瀬 宏 (MOMOSE, Hiroshi)  
津田塾大学・学芸学部・名誉教授

出町 未央 (DEMACHI, Mio)  
津田塾大学・学芸学部・修士課程  
(平成26年4月～平成27年3月 研究協力者)